

* 人物表

東	祐介 (二十四)	剣ノ幌村図書館司書
坂本	ユキ (九十四)	字の読めない老女
佐藤	信 (五十六)	剣ノ幌村図書館館長
高田	絵里子 (二十三)	祐介の元恋人
木村	ヨシ (七十八)	ユキの隣人
医者		
看護師		
子供達		

川のせせらぎや鳥のさえずる音。

杖を付き、ユキが歩いて来る。

坂本ユキ(九四)「ここに来れば、字、読めるようになるってかい？」

東祐介(二四)「はい？」

館内アナウンス「本日は図書整理日のため午後三時で閉館します。貸し出し希望の方はお早めにお願います」

ユキ「私ね、字、読めないんだわ。でもね、死ぬまでに字、読めるようになりたいと思ってるさ」

祐介(N)『また変なおばあちゃんが来た。』

ここ剣の幌村に新米の図書館司書として赴任してから半年が過ぎた。老人からトンチンカンな質問をされる事にも慣れてきた』

祐介「おばあちゃん、ここは本を貸し出す場所なんですよ。字を覚えるところではありません」

祐介(N)「故郷再生資金一億円を利用して、一五八二人の村に蔵書十萬冊の図書館が建てられて二年になる」

ユキ「ああ、そうだったかい？立派な建物出来たから、てっきり、字も教えてくれるって思ったわ」

祐介「(つぶやくように)字は学校で教わるもんだろ」

ユキ「耳はいいんだ！馬鹿にするんでねえ。学校に行っていないと思って」

祐介「(慌てる)いや、そんな馬鹿にするなんて」

佐藤信(五六)「東君？」

祐介「館長」

ユキ「あれ、佐藤さんちの信ちゃん」

佐藤「ユキばあちゃんねえの、どうした？」

祐介「お知り合いですか？」

佐藤「ユキばあちゃん知らない人はいないよ、何たって、九四才で村の長寿番付No.2だから。ばあちゃん、どうしたい？」

祐介「長者番付？」

佐藤「長寿番付！」

ユキ「ここ来れば、字、教えてもらえるんでねかったの？」

館内アナウンス「本日の閉館時間になりました。お急ぎ下さい」

佐藤「ああ、そうだ。でもなあ、今日はおしまいだから、明日、来てくれるかい？この東祐介が責任を持って教えるから」

祐介の背中を叩く音。

祐介「館長！」

ユキ「そうかい、よかったわあ。楽しみだあ」

杖を付いてユキが歩いて去る。

祐介「僕が教えるんですか？司書の仕事じ

やないですよ」

佐藤「図書館は本を読む喜びを教えるところなんだ。ユキばあちゃんは家が貧しくて小学校にも行けなかった。カタカナが少し読める程度、もちろん無筆だ」

祐介「はあ？日本で、識字率100%のはずでは」

佐藤「どこにでも例外はある」

ブリッジ。

電話の音。

祐介「はい、東です」

高田絵里子(二三)(電話の声)「祐介」

祐介「絵里子か」

絵里子(電話の声)「北海道の暮らしはどう？」

祐介「一番近いコンビニまで二〇キロって生活が快適な訳ないだろ」

絵里子(電話の声)「夢のためじゃなかったっけ？」

祐介「そう簡単に行かないよ」

絵里子「文学部首席卒業でも作家になるのは楽じゃないか」

祐介「そっちはどう？直彦と上手くやってるの？」

絵里子「うん、なんとか」

受話器を置く音。

祐介(N)「直彦の話をしたとたん、話す事がなくなった」

キーボードを打つ音。

祐介(N)『別に夢のためじゃない。そうでも言わないと、格好がつかなかった。絵里子と直彦の側にいられなかっただけだ。元彼女と親友が付き合い始めるなんて、いたたまれないだろう』

ブリッジ。

子供達の声。ざわめき。

祐介「あいうえお、かきくけこ、」

ユキ「(たどたどしく)あいうえお、かきくけこ、さしすせそ、たちつてと…お兄いちゃん、もうひらがなは大丈夫だ。字、読めるって嬉しいもんだね」

祐介「あの、今までは不自由なかったですか？」

独り暮らしと聞きましたか？」

ユキ「なんもだ、役場から手紙が来たら、隣の木村さんちで、読んでもらえばいいし、選挙の時だって、入れる人の名前の練習さあすれば、困らねえわ」

祐介「じゃ、どうして今頃」

ユキ「お迎えが近くなつての、あん人が書いた手紙、読めねえままじゃ、合わせる顔、ないわあ」

祐介「あん人？」

ユキ「連れ合いだあ。中国でね、戦死したんだわ」

祐介「そうなんですか」

ユキ「戦地からね、最後に貰った手紙、どうしてだか、漢字ばかりで今だに読めないでいるの、それ読んでかんとな、あん人に叱られるわ」

祐介(N)「ユキおばあちゃんは六十年近く、そう思い続けて来たんだろうか」

ユキ「近頃なあ、特にそう思うの。お迎えが近いのかもなあ、ハッハッハ」

祐介「…特訓、しますか。じゃ、ユキさん、これ読んでみて、この字が”空”」

ユキ「そら」

祐介「これが”森”」

ユキ「もり」

祐介「これが”山”」

ユキ「やま」

祐介「これが”花”」

ユキ「はな」

ユキ「はな」

ユキが杖を付きながら去って行く。

佐藤「熱心だな。毎日だろ」

祐介「身寄りが無いって、聞きましたか」

佐藤「友達は今じゃほとんど天国だろ。息子さんがいたんだが、五十年前も前に家出した

らしい」

祐介「淋しいですね」

佐藤「それを見せないで明るく楽しく生活してるよ。ハードボイルなばあちゃんさ」

祐介「ハードボイルですか…」

ブリッジ。

グラスの中で氷が溶ける音。

祐介(N)「九月の末に絵里子から結婚式の招待状が届いた」

呼び鈴が鳴る。

祐介(M)「うるせえな、誰だ」

ドアを開ける音。

祐介(N)『ユキさんが小さな体に風呂敷を背負って立っていた』

ユキ「休んでるって聞いたもんだから。風邪でも引いたか？」

祐介「どうしてここが…」

ユキ「図書館のお兄ちゃんの家、村のもんならみんな知ってる」

祐介「はあ、そうですか」

ユキ「どうした、昼間っから飲んでたの？」
祐介「いや…」

ユキ「なんかいやなことでもあったの？」

祐介「そういうわけじゃ…」

ユキ「まあよかったわ。芋餅持ってきたんだわ。食べないかい」

フライパンで餅を焼く音。

ユキ「東京の人は美味しいもの、食べ慣れているから。口に合うといいけれども」

芋餅を食べる音。

祐介「美味しいです」

ユキ「そうかい、よかった、よかった。美味しいもん、食べれば、気も晴れる」

祐介(N)「その芋餅は喉につっかえて、中々落ちていかなかった。無理に飲み込もうとしたら、涙が出た。止めどなく出た」

ユキ「どうしたの？」

祐介「…好きだった人が結婚することになったんです。俺の一番の友達と」

ユキ「あれー。なして？」

祐介「なぜ、なんだろう…」

祐介(N)「招待状には絵里子の字で、あなた

の夢に私はかなわなかったわ、と書かれていた」

ユキ「縁は人が決めるもんでない、神さんが

決めるもんだ。仕方ない、仕方ないさ。芋餅食べ」

芋餅を食べる音。

祐介(N)「芋餅を八個食べたなら、涙は止まった」

ユキ「(絵本を読んでいる―たどたどしく)

…ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしらとつぶやきました」

祐介「あっ、それ」

ユキ「年寄りになると気がせてな、後ろから読んでしまったわ」

祐介「その好きだった人から最初に貰ったプレゼントです、この絵本」

ユキ「…てぶくろをかいに…これはなんて読むの？」

祐介「新美南吉」

ユキ「どんな話？」

祐介「こぎつねが里に下りて手袋を買う話です」

ユキ「そうかい…でもどうして(たどたどしく絵本を読む)…人間はいいものかしら？なんだい？」

祐介「それは最初から読まないと分かりませんよ、お貸しします、それ」

ユキ「はっはっは、そうだねえ」

ブリッジ。

館内アナウンス「まもなく閉館になります。

貸し出し希望の方はお急ぎ下さい」

佐藤「ユキばあちゃん、顔、みせなかったんでないかい」

祐介「昨日もです。どうしたのかな。具合でも悪いのかな」

佐藤「年だからなあ」

祐介「帰りに様子、見に行ってください」

佐藤「おっ、やっと村のコミニケーションってヤツ、わかってきたんでねえの」

車の音。

祐介(M)「すげえ山奥じゃん」

祐介(N)「館長に聞いたユキさんの家は市街地から車で二〇分程走った山の中にあつた。ユキさんはここから毎日杖をつけて図書館に来てくれていたんだ」

ユキ「(咳をしながら) 済まないねえ。缶詰までもらって」

祐介「二、三日、見えなかったんで、心配しました。風邪ですか？」

ユキ「なんともないわ。寝たり起きたりしたら直った。その間も本、練習したよ。」

…(ただただしく読む) 寒い冬が北方から
…」
祐介「かなり読めるようになりましたね」
ユキ「あんなの手紙、もう少しで読めるべか？
これなんだ」

タンスの引き出しを開ける音。

祐介(N)「ユキさんが手渡してくれた手紙
は黄ばんでタイムカプセルに入っている手
紙のようだった。僕は黙読を始めた」
祐介(N)「(手紙を読む) 明日、前線に
行く。死を前にしてにどうしても言ってお
からければならないことがある。

私は大陸で一人の従軍看護婦と出会った。
お前のことを考えなかったわけではないが、
どうしてもその人と別れられなかった。今、
彼女の腹の中には俺の子がいる。
許してくれ。

骨になってもお前のところにはもう二度
と戻るつもりはない。進一の事、よろしく
頼む」

シヨック音。

ユキ「どうだい？」
祐介「えっ…あつ、いや、まだ難しいですね。
字も小さいし」
ユキ「やっぱりかい？ 漢字はまだ二〇個く
らいしか、読めねえしな。それに老眼鏡つ

くんねえとな」

祐介「持っていないんですか？」
ユキ「今まで、字読めんかったから、必要な
かったもの」
祐介「あつ、そうか」

二人の笑い声。

車のエンジン音。

祐介(N)「ほっとしていた。ユキさんから
手紙の内容について尋ねられたらどうしよ
うとそればかり考えていた」

間

祐介「はい、返却期限は一〇月三十一日だか
らね」
少年「分かりました」

佐藤「寒いなあ」

祐介「初雪降るらしいですよ」

木村ヨシ(七八)「あのなあ、ちょっと相談
あるんだわ」

佐藤「あれ、木村さん。東君、ほれユキさん
の隣に住んでる、木村さん」
祐介「初めまして。ユキさん、風邪治りまし
た？」

木村ヨシ「いやあ、それがね、どんどん悪く
なるんだわ。病院さ、行くように言っても、
ユキさん、医者嫌いだしよ、行くって言わ

ないのさ」

佐藤「そりゃ、心配だなあ」
ヨシ「それで、ユキさん、この兄さん、気
に入ってるから、病院に行くように説得し
て貰おうと思ってるさ」

祐介「館長、行ってきていいですか？」
佐藤「ああ、俺からもお願いするわ」

車のエンジン音。

ヨシ「ユキさん、字、読めるようになったっ
て喜んでたのになあ。あんたの事も気に入
って。芋餅八つも食べてくれたって。孫い
たらこんななんだろうなって。嬉しかっ
たんだべさ、ずっと一人だったから」
祐介「あれから寝込んだままでですか？」
ヨシ「もう一週間になる。肺炎にでもなっ
たら大変だべさ」

車の止まる音。

激しい咳の音。

ヨシ「ユキばあちゃん、図書館のお兄ちゃん、
来てくれた。車で病院に連れてってくれる
さ」

祐介「ユキさん、病院行くうよ」
ユキ「病院は嫌いだ」
祐介「ここで寝てもよくなりませんよ」
ユキ「九四年間、一度も医者に行かなかった

のが自慢なんだ、病院なんか行ったら死んだあん人に申し訳ねえべさ」

ヨシ「そんなことねえ、旦那さんも心配してる」

祐介(N)「そうでもないと思うけど」

ヨシ「なあ？」

祐介「あつ、そうですよ。それにもうちよつ

とで“手袋を買いに”全部、読めるようになる

ところだったでしょう？早く元気にな

らないと」

ユキ「そうだけど…」

祐介「僕がおぶって行きますよ」

ヨシ「ほれ、ユキさん」

ユキ「申し訳なくてな…」

祐介「遠慮しないで下さい。ほら背中に」

ブリッジ。

医師「レントゲンで見ると肺炎ですよ。どうしてここまでほおっておいたんですか」

ユキの咳。

祐介「大丈夫でしょうか」

医師「樂觀出来ませんね。なにしろお年です。入院しましょう」

ストレッチャーの音。

看護師「おばあちゃん、検査ですよ」

ユキ「おつかねえなあ」

祐介「大丈夫だよ」

紙を開く音。

ユキ「(夫の手紙を読む)：死を前にしてに

どうしても言っておからなければならないこ

とがある…」

祐介「あつ！ユキさん」

祐介(N)「ユキさんは懐から例の手紙を読

み始めてた」

祐介「(慌てて)手紙は後でゆっくり読もう

よ！」

ユキ「どうなるか、わかんないもの」

祐介「いいから！」

ユキ「よくねえ」

祐介「預かっておくから！」

ユキ「やだべさ」

手紙が破れる音。

祐介「あつ！」

ユキ「(涙声)手紙が、手紙がやぶれたべさ！」

祐介「ごめん！」

ユキ「(力なく)あん人の手紙が…」

祐介「破くつもりじゃなかったんだ！」

ユキの呼吸が荒くなる。

看護師「おばあちゃん、しっかりして！」

先生、先生！」

病室に心電図などの電子モニター音が響く。

祐介(N)「ユキさんは心臓発作を起こしていた」

吹雪の音。

祐介(N)「降り始めた雪は季節外れの吹雪

になった。夜明け近くになっても止む気配

がなかった。その音が僕には肺炎を併発し

ているユキさんの呼吸音のように聞こえた。

予断を許さない状況だった」

祐介「先生」

医師「意識が戻れば、なんとか」

間。

祐介(M)「ユキさん、目覚ましてよ」

電子モニター音。

祐介(M)「ユキさん、ごめんなさい。でも

どうしても読ませられなかった。ご主人の

こと、亡くなってからずっと好きだった

んでしよう、だからあんなに頑張って、字、

読めるようになったのに…。

愛、なんてやっぱ、幻想だよ！ ああ、

俺は絵里子がそれを教えてくれたから、幸せだよ。

「ただ、ユキさんには悲しい思いして欲しくないかったんだ、あんなひどいこと、知らないほうがいいよ！」

ユキ「(弱々しく)：知ってます」

祐介「ユキさん！」

ユキ「：ああ、手紙来た時、木村さんちの祖父さんが教えてくれた…」

祐介「じゃ、どうして、読もうだなんて！」

ユキ「自分でな、読んで確かめないと、あの世で会ってから、夫婦喧嘩も出来ないべ」

ユキ、息づかいが荒くなる。

祐介「わかったよ。わかったら。看護師さん、看護師さん、ユキさん、意識が戻りました！」

図書館、子供たちのざわめき。

祐介(N)「ユキさんは二ヶ月ほど入院し、年末には退院した。もう少しすれば図書館にも来られるだろう。その間に僕は一本の小説を書いた」

佐藤「東君！」

祐介「はい？」

佐藤「これ、東君でしょ。ほれ、この文壇二月号の新人小説賞、佳作、東祐介”山の図書館”って」

祐介「わかつちやいましたか」

佐藤「わかつちやいましたかって、すごいことだべさ！ 村長に言わないと」

祐介「そんな大げさな」

祐介(N)「書いたのは文字の読めない老女と戦死した夫について、だった。言うまでもなく、ユキさんがモデルだ」

杖を付いてユキが歩いてくる音。

ユキ「兄ちゃん、芋餅、持ってきたよ」

祐介「ユキさん！もういいんですか？」

佐藤「おう、ばあちゃん、命拾いましたな」

ユキ「まだまだ死ねないさ、あと一〇冊くらい、本読めるようになっていくな」

祐介「元氣そうでよかった」

ユキ「世話になったな。本当にありがとう」

祐介「俺こそ、手紙やぶいちゃって」

ユキ「大丈夫だ、ツギ、当てたもの。はっはっはっ」

ブリッジ。

館内アナウンス「絵本読み聞かせが3階リーディングルームで始まります。今日の絵本は新美南吉”手袋を買いに”です」

子供達のざわめき。

ユキ「(絵本を読んでいる)：お母さん狐

は、「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら」とつぶやきました：おしまい」

子供の声「おばあちゃん、人間はいいものなの？」

ユキ「そうだなあ、この年になってもわかんねえなあ。きつと本、いっぱい読めばわかるわあ。あんたもいっぱい読んでよ」

子供「うん！」

(了)

引用文献

新美南吉『手袋を買いに』